長期間継続して訪問リハビリテーションを行うことの意義と問題点

島田悟（PT）[1)]　，山田尚子（PT）[1)]
1）医療法人社団　らぽーる新潟　ゆきよしクリニック

キーワード：訪問リハ　　長期間継続　　意義と問題点

【はじめに】訪問リハビリテーション（以下訪問リハ）の継続・終了については議論の分かれるところである。今回通所サービスに繋げることができず、長期間に渡って訪問リハを継続している脳血管障害の事例を通してその意義と問題点について検討する。
【事例】1. 脳出血　右片麻痺　73 歳　男性　2002 年 8 月から訪問リハ開始（週 1 回）。介護度は要介護 2 から要支援 2 に軽減。独居、障害の受容困難、近辺に通所リハ施設がないといった要因により、介護度は軽減しているにも関わらず訪問リハを継続している。2. 脳梗塞　右片麻痺　65 歳　女性　2008 年 2 月から訪問リハ開始（週 2 回）。介護度は要介護 1 から要支援 2 に軽減。夫と 2 人暮らし。発症前から自律神経失調症・うつ傾向があり、退院後訪問リハと訪問介護を利用し、通所介護へ順次変更したが、疲労困憊と認知症利用者に対する拒否反応から利用中止となる。しかし将来に対する強い不安感から訪問リハは継続している。
【考察】この 2 つの事例では要介護度が軽減しているにもかかわらず、通所サービスに繋げることができずに訪問リハを継続している。通所サービスに代わっての現状機能維持、社会的閉じこもりの防止、精神心理面でのサポートが訪問リハの重要な目的となっている。その一方、問題点として目標の不明確さ、内容のマンネリ・訓練化、担当セラピストの精神的負担の増大、利用者・家族の自己満足に陥りやすいといった点が挙げられる。

文字数　593文字